３武士の時代の始まるころ

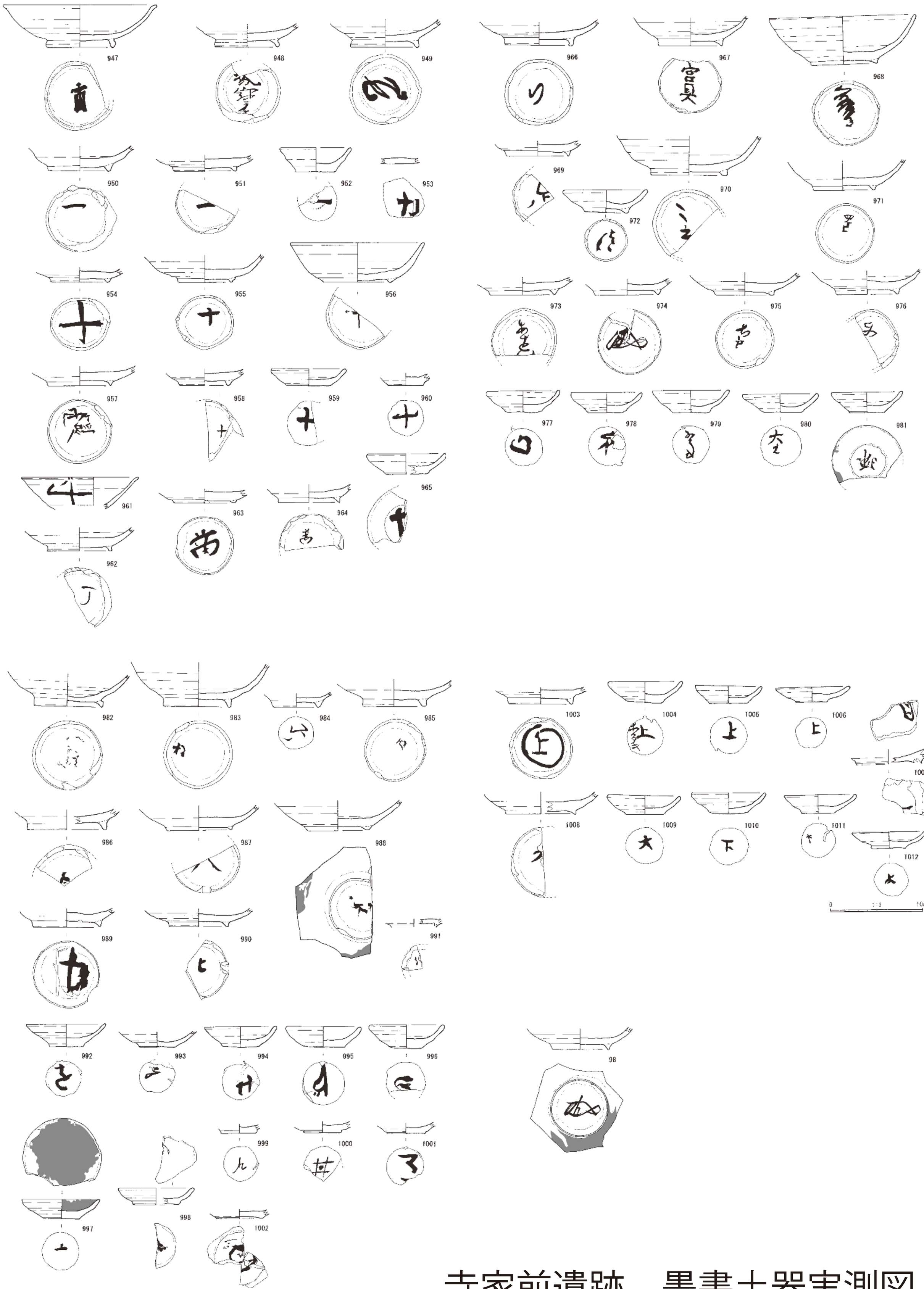
武士は戦闘を家業とする人々のことです。平安時代の終わりごろになると、それまで政治を支配していた貴族に代わり、武士が実権を持つようになり、そのトップは、明治時代になるまで支配階級として政権を担いました。

藤枝パーキング上り付近に位置する寺家前遺跡では、平安時代後期（11 世紀末）から始まる溝や柵列等で区画された屋敷地群が合計３箇所発見されています。

屋敷地群は、溝や柵で四角く二重に区画されており、内郭とした内側の区画内には、柱が太く規模が大きい建物が密集し、外郭と呼ぶ外側の区画には、柱が細く規模が小さい建物が散漫に配置されている状況が明らかになりました。外郭は約 2,500m2、内郭は約 600m2 の規模で共通しています。

屋敷地群は平安時代後期～鎌倉時代中期（11 世紀末～13 世紀代）に最盛期であったようで、山茶碗をはじめとする土器が数多く出土しました。なかでも「花押（かおう）」のある墨書土器（ぼくしょどき）は葉梨荘領主（はなしのしょう）を表す可能性のあるものとして注目されます。

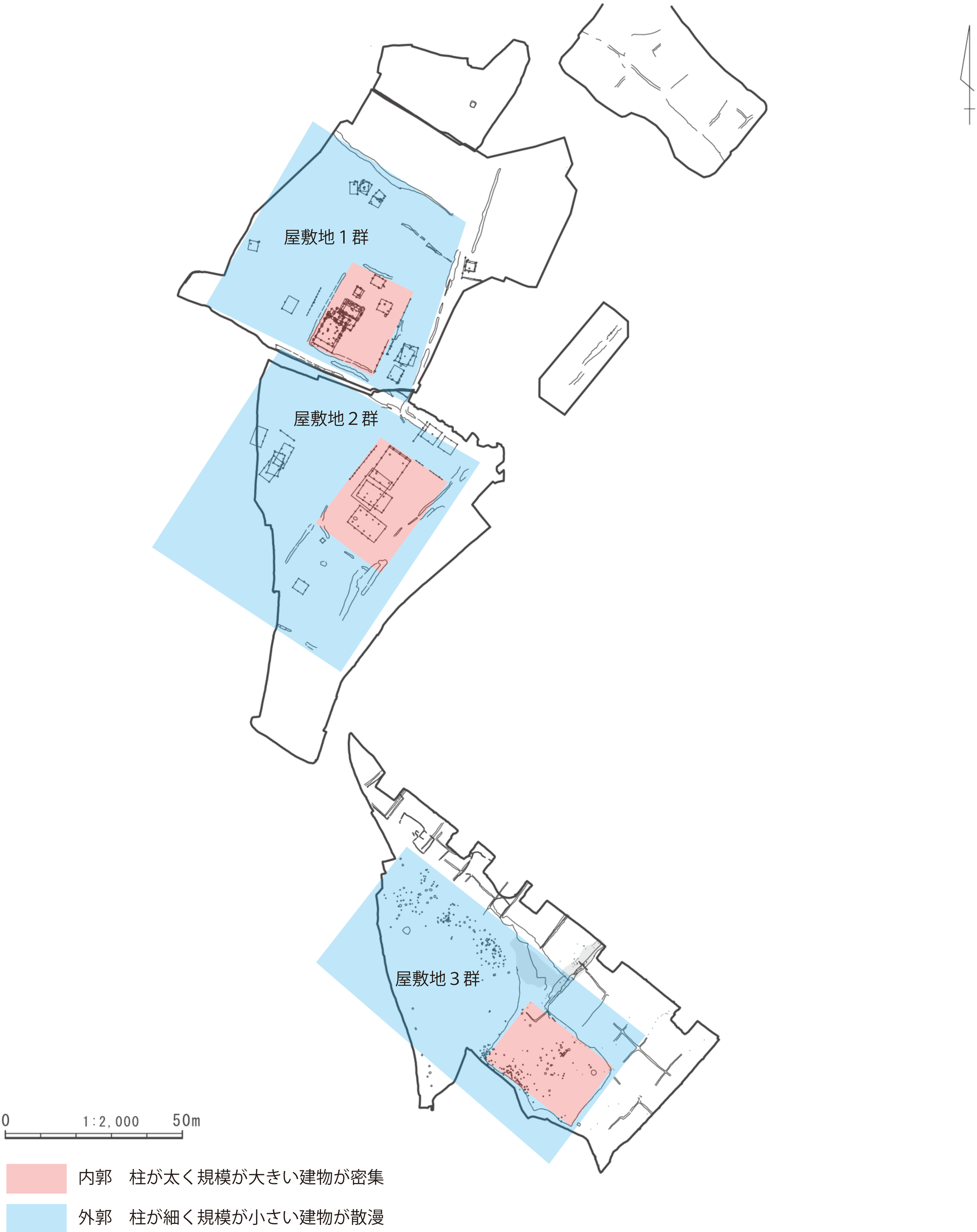
また、仮宿堤ノ坪（かりやどつつみのつぼ）遺跡でも、同じ時代の建物群や「花押」を書いたとみられる墨書土器が出土しています。仮宿地域の当時の領主に関わるものと考えられます。



寺家前遺跡　墨書土器実測図

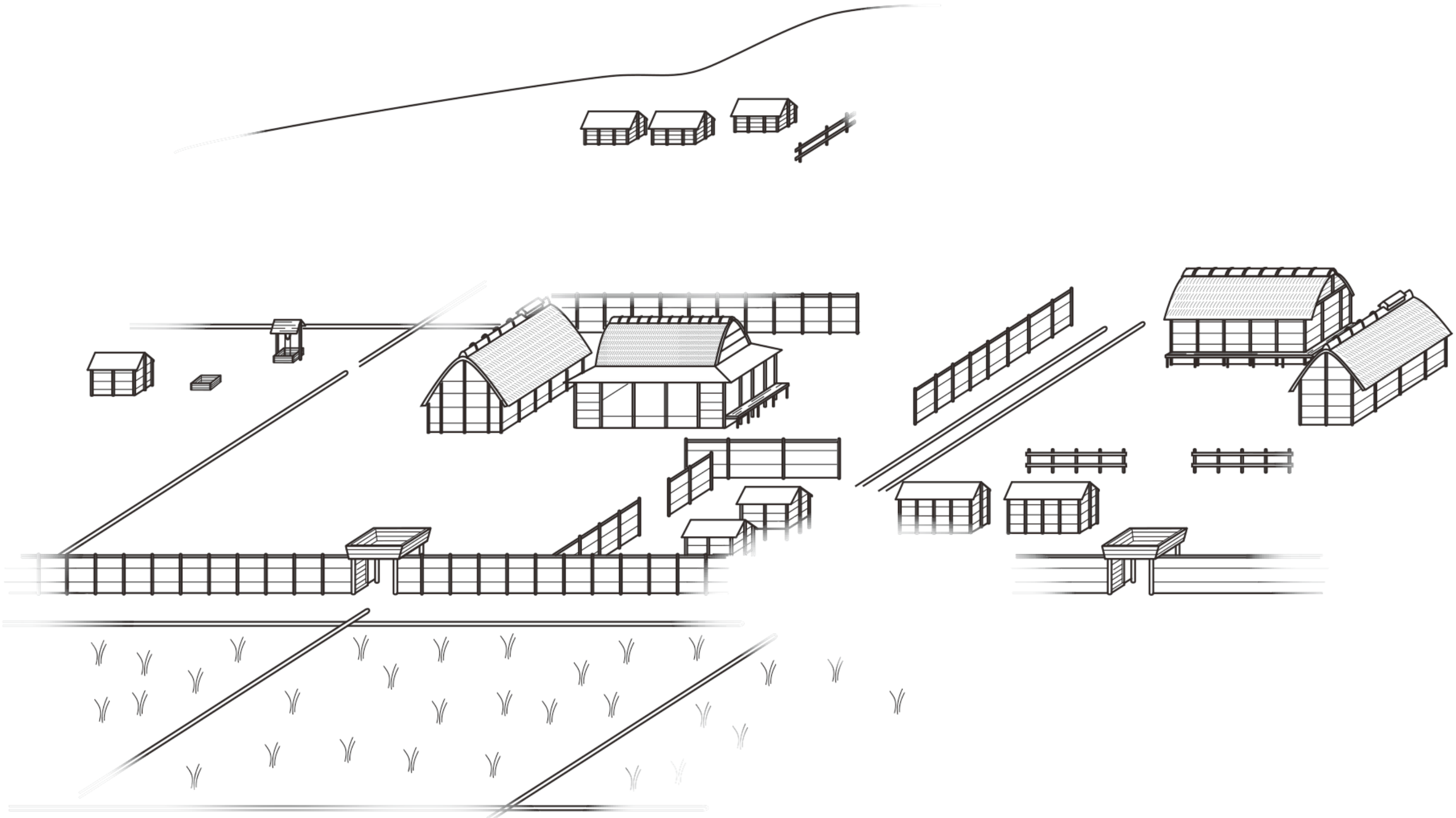
寺家前遺跡から東をのぞむ

寺家前遺跡全景



寺家前遺跡　平安時代後期～室町時代の屋敷地

寺家前遺跡　大型建物



寺家前遺跡　屋敷地群の復元図

寺家前遺跡　井戸

寺家前遺跡　草鞋

寺家前遺跡　扇

今川氏の駿河支配の出発点

屋敷地群は、鎌倉時代後期～室町時代（14 世紀以後）も規模は縮小しながら存続していたと想定されます。建武 4 年 (1337)、足利尊氏が今川範国に恩賞として「葉梨荘」を与えて以降、従来の領主に代わって今川家の家臣がこの地を治めるようになったと考えられます。寺家前遺跡で発見された屋敷地群の衰退は、この事象と密接な関係があったと推測されます。

足利尊氏下文写 今川家古文章写
下す 今川五郎法師法名心省
早く領知せしむべし駿河国羽梨庄、遠江国河会郷、
ならびに八河郷の事右、人を持って勲功の賞として
宛行ふところなり。てへれば先例を守り、沙汰致す
べきの状件のごとし。
（足利尊氏）等持院殿
建武四年九月廿六日 御判

今川時代の藤枝

寺家前遺跡の周辺には「今川氏館」を筆頭に「矢部屋敷」、「松井屋敷」、「大楊屋敷」、「左近屋敷」など、今川氏とその家臣に関連する屋敷地があったと推定され、遺跡の北西には今川義元が台頭の契機となる花倉の乱の舞台になった花倉城が存在しています。寺家前遺跡では今川時代の遺構は明確ではありませんが、寺家前遺跡を含む西駿河地域が今川氏にとって重要な土地であったことを示していると言えるでしょう。

仮宿堤ノ坪遺跡 藤枝岡部インターチェンジと国道１号を結ぶ道路付近

朝日山城の山麓で、仮宿堤ノ坪遺跡の発掘調査を行いました。朝日山城は不明な点が多い城ですが、平安時代後期にこの地に根付いた岡部氏との関わりが推定されています。

遺跡は、平安時代末から鎌倉時代の、掘立柱建物跡、柱穴跡などで、山裾のわずかな平坦部を利用して、約 30m四方の範囲に小規模な屋敷跡があったとみられます。

土器類のほか、白磁片、木製農耕具、寺家前遺跡と同様、「花押」のような墨書がある土器が出土しており、この地域の領主を示すものと考えられます。古文書などではわからない、地域の歴史の手がかりとなる貴重な歴史資料です。なお、山茶碗の中に、特殊な器種がみつかっています。仏具として用いる、托と碗が一体化したようにも見える形状です。ここに住んだ幻の領主が、日々、仏具として用いていたものかもしれません。

仮宿堤ノ坪遺跡　調査地全景

仮宿堤ノ坪遺跡　水田跡

仮宿堤ノ坪遺跡　建物群